

児童健全育成賞（数納賞）佳作

# 児童館における防災プログラムの実践

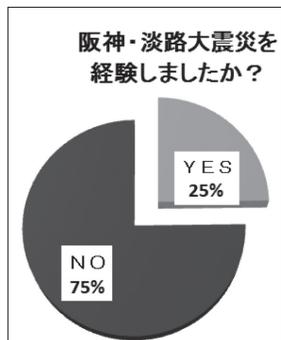
兵庫県西宮市

神戸市東灘区社会福祉協議会 子育てコーディネーター 大角 玲子

## 1. はじめに

2015年1月17日、阪神・淡路大震災からちょうど20年を迎えた。神戸市では、20年を節目とした追悼行事、防災を考えるフォーラムなど、様々な行事が行われた。私たち児童館関係者も、写真展の開催、リーフレットの作成などを通して、当時を振り返った。写真展では、児童館が被災した建物の被害状況、仮設住宅に出かけて行って子どもたちと遊んだ「あおぞら児童館」の様子などを写真展示し、リーフレットでは、現在児童館が取り組んでいる防災プログラムも紹介した。

しかし、20年の節目を過ぎ、震災の記憶、防災への意識に「風化」の傾向が見られることは否めない。2014年度に神戸市在住の乳幼児を持つ母親に聞き取り調査を行った結果、「阪神・淡路大震災を経験しましたか？」の問いに「YES」と答えた乳幼児の母親は129人中32人と、実に3割に満たないという結果が得られた。2013年に



同様の調査を行った際には、約5割強であったことを考えても、その割合は速いスピードで減少に向かっていていると考えられる。

主な調査場所であった中央区は、神

戸の中でも人口の移動が激しく、県外から転入してくる若いファミリー層が多いことも結果に影響していると思われるが、いかにして阪神・淡路大震災の教訓を風化させることなく次世代に継承していくかは、現在大きな課題となっている。

そのような状況をふまえ、今回、神戸の児童館を中心とした防災プログラムの実践における成果と課題を検証し、その意義について改めて考えてみたいと思う。そして、阪神・淡路大震災から20年経った今、神戸の児童館にできることは何か、その可能性も併せて探っていききたい。

なお、災害のリスクを最大限回避する、備蓄品等の備えを考える、など減災や自助・共助に関する啓発プログラムも文中では全て「防災プログラム」と呼んでいることを冒頭に断っておく。

## 2. 防災プログラムの実践

### (1) 乳幼児の母親を対象としたプログラム「愛のミルク」

神戸市の備蓄倉庫には、「愛のミルク」という名称の粉ミルクが備蓄されている。缶入りの水、スティックに入った粉ミルク、缶に装着できる乳首部分がセットになったものであるが、缶入りの水は、缶の突起を押すと発熱し、缶自体が熱くなってお湯ができるという点が大きな特徴である。（現在は、缶ではなく、ペットボトルを温めるものになっている。）阪神・淡路大震災（以

下、震災)の際、粉ミルクはあってもお湯が手に入らなかったという教訓から、備蓄されるようになったものである。

粉ミルク、水にも保存期限があり、保存期限を迎える前に「愛のミルク」の入れ替えが毎年行われる。3年前、この事を聞いたS子育てコーディネーターが「そのまま処分されるのはもったいない」と入れ替え後のミルクを啓発用に使用することを区の防災担当課に要請したところ、快く提供してくれることになり、「愛のミルク」プログラムがスタートするに至った。

私がこの「愛のミルク」を中心としたプログラムを最初に実施したのは中央区のK児童館で、乳幼児の母親約20組を対象としたものであった。内容は、以下の通りである。

①「愛のミルク」紹介、4～5人グループで1セットずつ試作

②お湯が熱くなるまでの間「防災意識YES・NO調査」

③100円均一ショップで買える非常持ち出し袋グッズの紹介

④「愛のミルク」調乳、親子ともに希望者は試飲  
まず、①「愛のミルク」の紹介では、神戸市が震災の教訓からお湯までがセットになったミルクセットを備蓄倉庫に備蓄してあることを紹介する。「愛のミルク」の存在を知っている人は1人もいなかったが「愛のミルク」の存在を知ること、乳児のことも考えた備蓄であることの象徴として、母親にひとつの安心感を与えるものとなったようだった。

②の「防災意識YES・NO調査」では、

○就寝中地震が発生しても、懐中電灯が手の届くところにありますか？

○家族で、非常時の待ち合わせ場所、連絡方法を決めていますか？

などの問題を出し、その答えを予め各自に配っておいた「YES(赤)」「NO(青)」のカードで挙げてもらう。周囲を見回すだけで割合が一目瞭然で、参加者から「えーっ」などの声があがる。その後、「どこに懐中電灯を置いてる？」などの質問を行うと、母親から「スマホの懐中電灯アプ

リを入れて、枕元に置いています。」との話も出てくるなど、すぐに生かせる情報交換の場となった。

③「100円均一ショップで買える防災グッズ」の紹介では、実際に100円均一ショップで購入した防災グッズを紹介する。缶詰の他、体温低下を防ぐアルミブランケット、水栓付ポリタンク、電池式ランタン、紙製シューズ、簡易トイレなどかなりのものが揃うが、やはり安価な分、耐久性には不安もあるため、一時的なものであることを伝えている。しかし、100円均一ショップで揃える、という点にゲーム性があり、「1500円以内で非常持ち出し袋を作ってみる」など、ゲーム感覚で楽しみながら取り組むほうが着手もしやすく、それを入口に「自助」について考えたり、備えたりするきっかけづくりになれば、と思い、プログラムに取り入れている。

④「愛のミルク」は、②や③を行っている間に変化があり、缶からもくもくと白い蒸気が上がってくる。缶自体が大変熱くなるため、一旦幼児では手の届かない場所に移動させているが、時折、皆で缶の様子を見ながらお湯が沸くのを待つ。粉ミルクは、期限切れ間近ではあるが、備蓄倉庫の入れ替えから消費期限切れまでには数か月の猶予がある。その期間中は、ミルクの試飲も行い、期限が切れた後には紹介のみ行っている。試飲は希望者のみであるが、「初めて飲んだ」という母親や、お代わりをする幼児もいるなど、楽しい試飲タイムとなっている。

①～④で30分ほど時間を要するが、乳幼児の親子クラブ等での防災プログラムとしてはこの長さが限度かと思われる。幼児が同席していることもあり、これ以上長かったり、内容が防災学習に偏り過ぎると、防災に全く興味のない保護者が負担に感じそうだと見られた。楽しみながら、負担なく、かつ役立つ情報が得られるプログラムになるようなバランスを考える事が、児童館における防災プログラムには不可欠な要素であろう。

例えば地域の公民館で「乳幼児を対象とした避難訓練、防災についてのお話をします」と広報し

たとして、果たしてどれだけの親子が集まるであろう。いつも利用している児童館で、いつもの行事の一環としての防災プログラムであれば、防災に普段興味がなくとも負担なく参加し、防災意識向上につなげることができる。この「いつでも」「だれでも」を容易に実現できる、という点が、児童館で防災プログラムを行う大きな意義のひとつであろう。

乳児を抱えた母親は、災害弱者として支援が必要な存在であるが、遠慮が先に立ち、支援を申し出るには勇気を要するようだ。避難所でも、夜泣きする子を寒い野外であやした、という経験も聞いている。この「愛のミルク」を通して、「皆で赤ちゃんを見守っていますよ。だから遠慮なく助けを求めてくださいね」というメッセージを伝え、保護者の「受援力」を高める効果も、このプログラムに期待できるところである。

## (2) 「ぼうさいダック」を小学生対象プログラムに活用する

### ①「ぼうさいダック」の実践例

「ぼうさいダック」は、「幼児向け防災教育用カードゲーム」として、多くの児童館で活用されているものである。(作成：日本損害保険協会) 災害発生時等に最初にとる行動(ファーストムーブ)が自然と身に着くよう考えられたものであるが、幼児だけでなく、使い方を工夫すれば、小学校低学年にとっても非常に効果的なゲームである。以下、「ぼうさいダック」を使ったプログラム例である。

指導者：(冒頭で「防災」の意味、災害にはどんなものがあるかを子どもたちとやりとりした後、ぼうさいダック“津波”のカードを示す) これは何の災害かな？

子ども：津波！

指導者：そうだね。じゃあ、津波が来たときには、どうしたらいい？

子ども：高いところに逃げる。

指導者：正解！（カードを裏返す、チーターが走っている絵）

チーターみたいに早く走って、でき

るだけ高いところに逃げよう。じゃあ、やってみよう！津波がきたら……

子ども：チーター！（その場で走るポーズ）  
(中略、同様にカードを4枚覚えるまで繰り返す)

指導者：4枚のカードを覚えたね。じゃあ、テストしてみよう。どれが出るかわからないよ。その前に、掛け声の練習。私が「防災！」と言ったら「ダック！」と答えてね。「防災！」

子ども：ダック！

指導者：防災！

子ども：ダック！

指導者：はくさい！

子ども：ダ……

指導者：あーひっかかったな～！

防災！……

(数回繰り返す)

地震のカードが出たら… (“地震”のカードを示す)

子ども：ダック！（頭を手で覆って低い姿勢をとる）

(中略、「カードを出す→ポーズ」を繰り返す)

指導者：今日は4枚覚えたね。次は、新しいカードを使って遊ぼうね！



### ②「ぼうさいダック」プログラムの効果と留意点

「ぼうさいダック」は、昔からよく遊ばれているゲーム「おーちたおちた」「なーにがおちた」「りんご！（手を前に出してりんごを受けとめるポーズをとる）」というものに非常に似ている。また、合間に入れる「防災！」「ダック！」のやり

とりは、「キャッチ」という遊びで「キャーキャーキャッチ！…キャット！」など、違う言葉を言った際にひっかからないようにする部分を応用した。この「防災！」を違う言葉に変える遊びは、小学生は最初しか引っかかってこない。しかし、時折「白菜！」や「天才！」などを混ぜることで聞く集中力を高めることができる。また、子どもたちは、大きな声で「ダック！」と叫ぶことで、照れ臭さがだんだん払拭され、恥ずかしがらずに大きな動きでファーストムーブをとってくれるため、ゲームが盛り上がるといった効果がある。なお、「指導者」が、必ずしも大人である必要はない。子どもたちが交代で指導者役となって、カードを出すのも、盛り上がるひとつの方法である。

「ぼうさいダック」を、小学生にも楽しめ、かつ有効なプログラムにするには、いくつかの工夫も必要である。「ぼうさいダック」には全部で12枚のカードがあるが、それら12の動作をただ真似るだけでは、小学生向けの遊びであるとはいえない。それぞれのカードの持つ意味や、最初の動作が何であるかを推理するなど、知的な好奇心を満足させる仕掛けを加えることが重要である。また、多くのカードを一度に使うのではなく、1回につき3～4枚のカードを使ってじっくりと子どもとのやりとりをした方が、深い意識付けにつながるように思う。

このプログラムは、児童館・児童クラブの避難訓練の集合時にも使えるが、最適だと思われるのは、放課後児童クラブで、児童が帰る直前に集まり「終わりの会」を行う際などで継続的に行うことである。月に一度程度、定例で実施することで、日常の中で災害について意識を向ける機会を作ることができる。私が最初に実施した際には、K児童館にある放課後児童クラブ小学1～3年児童約50名が対象であったが、終了後には「次、いつやるの？」「他のカード見せて」と子どもたちが寄ってくるほどの人気ぶりであった。数か月後に私がK児童館を訪ねた際にも「あっダックの人や」と言われるほどであったことから、「ぼうさいダック」は小学生にも楽し

めるプログラムであったことが伺える。今後も児童館・児童クラブで活用していきたい。

### (3)防災カードゲーム「クロスロード」

#### ①ゲームのルール

クロスロードは、究極の二択を迫られるゲームである。例えば、「あなたは市民です。大きな地震が発生し、避難所に避難することになりました。あなたのペット(ゴールデン・レトリバー"もも"、3歳メス)を連れていきますか？」と言った問いに必ずYESかNOいずれかのカードを選び、テーブル上に示さなければならない。「オープン！」の掛け声とともに一斉に出されたカードの多数派に点数が入る、といった単純なゲームであるが、いくつかルールと特徴がある。

○正解はない(クイズではない)

○カードを選んだ理由を、グループ内で、全員自分の言葉で説明する(前の人と同じです、はダメ)

○質問しても良いが、人の意見を頭ごなしに否定しない

○YES(またはNO)のカードを出した人が1人だけだった場合には、多数派でなくその人だけに点数が入る

上記の問題を例に挙げると、「やはりペットは家族だから連れていく、だからYES」「ペットは連れて行きたいけれど、犬が嫌いな人もいるから、先に避難所の様子を見てみてからにする。だからNO」など、様々な理由が聞かれる。同じYESであっても、全く異なる意見の場合があったり、逆に違う答えでも、共感できる場合もある。他者の意見を聞いたり、質問をし合ったりすることで、考えを深めていくことができる。

#### ②クロスロードの実践と応用

「クロスロード神戸編」は、震災後の「文部科学省大都市大震災軽減化特別プロジェクト」において、神戸市の職員を対象に行われたインタビュー調査がルーツとなっている。錯綜する情報の中、「あちらを立てればこちらが立たず」の状況であっても職員が決断を迫られた実際の「ジレンマ」を事例としているため、そのリアルな設問に参加者は、ゲームと知りつつもジレン

マに悩んだ末に決断し、白熱したやりとりを繰り返す。限られた情報のみでYESかNOを決断することには難しさを伴うが、必ず選択する必要を迫られるからこそ、深く考えることのできるゲームである。また、「どうしてYES (NO) を選んだか」を口に出して述べることで、自分自身の考えを整理できるといった長所や、たとえ対立する意見であっても「ゲームの中の、想像上の設定」という枠があるおかげで、人の意見に耳を傾けることのできる楽しさもある。

このクロスロードゲームを、児童館においては、2～3歳児とその保護者対象のクラブ「すこやかクラブ」で実践した。オリジナルの問題に、乳幼児を持つ母親を想定した問題も加えて実施してみると、災害について「不安になるから考えたくない」「この子が一緒にいる時に災害に遭ったら守れないんじゃないかと、想像しただけで怖い」などと口にする母親が多く見られたことに驚いた。しかし、一方では非常持ち出し袋について、「子どもが大好きな味のお菓子や非常食を入れていて、毎年1月17日には袋から出して食べます」というローリングストックを実践している母親の発言もあった。同じ乳幼児を持つ母親の立場からの前向きな意見に、不安を口にしていた母親にも少し気持ちに変化があったようで、「私もやってみよう」の声が聞かれた。このゲームの要は、「真剣に想像する」ことである。真剣に想像し、決断する経験を、ゲームの手法を用いてシミュレーションを繰り返すことは、立派な「訓練」といえるだろう。この訓練の積み重ねは、やみくもに不安がるのではなく、冷静に色々な場面を想定した上での備えを考える、という姿勢を生むことにもつながると考えられる。

このクロスロードゲームをもとに、小学生を対象とし、問題も小学生向けにした「どっちかな?ゲーム」も、複数の児童館で実践されている。対象を小学生向けにした問題も作られているが、問題を作る場合には、

- 正解のある“防災クイズ”にならないようにすること
- 問題がYES、NOのどちらかを示唆する表現に

ならないこと  
という点に留意する必要がある。

また、児童館での実践例ではないが、2014年の夏休みには、中央区内全ての中学校から中学生約30名が集まり、「防災ゲームクロスロードで考えよう～今、地域で求められる中学生のパワー～ “守ってもらう” から “守る” へ」が実施された。昼間に災害が発生した場合、多くの人は働きに出ており、住宅地の地域に残っているのは、高齢者等要援護者が多くなる。昼間、地域内にいる可能性の高い中学生は、支援に貢献できる大きな力として期待されている。このゲームの中でも、「近くに、耳に障害のあるおばあちゃんがいるので、まずはその家を訪ねて避難するように伝える」「普段から顔見知りになっておく必要があるから、自分から挨拶するようにしたい」など、地域の支援者としての頼もしい発言も聞かれた。

クロスロードは、対象や年齢に合わせた問題設定も可能であるし、また、「高齢者と中学生」「大学生と小学生」などが同じグループで論じ合うこともできる。今後、活用の幅を広げていきたい。

#### (4)地域との連携「うおっこぼうさいがっこう」

地域と連携したプログラムが実施できる点も、児童館のメリットである。学校においても、地域の消防団を招いた避難訓練や授業が行われているが、地域と一緒に企画から考え、作り上げていく防災プログラムを実施することは、忙しい学校の授業の中では難しい。地域が実行委員会を組織して、防災プログラムを実施した例として、2015年10月に魚崎児童館で実施された「うおっこぼうさいがっこう～世界一受けたい防災授業～」を紹介する。

##### ①魚崎児童館と魚崎町防災福祉コミュニティ

魚崎児童館は、発達障がい児の子育て講座や、シニアの託児ボランティア養成等を行っている、東灘区の「拠点児童館」である。併設の放課後児童クラブ児童も約130名おり、日々の事業に追われる中、今回防災プログラムに取り組むこととなった。実行委員は、児童館のすこやかクラブ(2～3歳児とその保護者対象の親子クラブ)

に在籍する母親3名、魚崎町防災福祉コミュニティメンバー8名、民生委員・児童委員3名、児童館スタッフ3名、子育てコーディネーターの計18名である。

防災福祉コミュニティとは、自治会、消防団などで組織される近隣生活圏の自主防災組織で、神戸市全域で191組織されている。魚崎町防災福祉コミュニティ（以下防コミ）は、防災の訓練や啓発活動など、日々防災について熱心に取り組んでおられるが、それでもやはり防災訓練の形骸化、高齢化が進む組織に危機感を覚える、と言った声も聞かれる状況で、今回、若い世代と一緒に取り組むことに大変意欲的であった。

### ②実行委員会とプログラムの立案

実行委員会では、まず最初に「児童館が主体ではなく、あくまでも準備、広報、実施の全てを実行委員で行うこと」を確認した。児童館主導でも、防コミ主導でもなく、防災知識の乏しい若い母親でも自由に意見を出し、作り上げていくプログラムでなければならない、という点が共通理解されることが、この行事の成功に不可欠であったためである。

幸い、すこやかクラブの母親たちも、防コミのメンバーに臆することなく、質問やしつかりとした意見を出してくれた。母親たちからは、「待ち時間が長いと、子どもたちが退屈して、私たちも落ち着いて学ぶことができない」「カードを作ってスタンプラリー形式にしたほうが楽しめる。消しゴムスタンプを作ってくるから、それをポイント用に使わない？」などのアイデアが出された。一方、防コミメンバーは、プログラムの蓄積、経験もさすがに多く、その中から幼児の親子に合うものを提案してくれた。そして、「非常持ち出し袋には、私らと違うものが要るよね？紙おむつ、何枚くらい入れといたらいいい？」など、従来のプログラムを、対象に合わせたものへと変換する柔軟性も発揮してくれ、防コミと若いママを中心に「共に作り上げるプログラム」が練られていった。

### ③当日の実践

当日は、約40組の親子がグループに分かれ、

以下の5つのポイントを順に回るスタンプラリーの形態をとって行われた。

- けしまる&クイズ(ミニ消防士の制服を着て、消防署から借りたミニ消防車「けしまる」に乗って記念撮影。母親向け防災クイズを行う)
- ポンプ車の試乗(消防団のポンプ車に実際に乗せてもらう)
- 新聞でスリッパを折ろう(汚れた床で使えるスリッパ製作)
- 非常持ち出し袋の展示、非常持ち出し袋を背負ってみよう  
(5kgと10kgの持ち出し袋を背負い、子どもを抱っこしてみる)
- 非常食試食、愛のミルク紹介(アルファ米のチキンライスなどを試食)

### ④成果と課題

大変実りも多く、参加者の評判も上々であったが、すべてが上手く運んだというわけではない。

まず、当日の朝になって、「けしまる&クイズ」コーナー担当の防コミAさんから「やはり、服を着るのにもたついて、時間が足りなくなりそうだから、クイズをやめよう」との提案が出された。同じグループの母親Bさんが私を呼びに来て「どうしたらいい？」と困った顔をしている。というのも、防災クイズは、防コミCさんが紙芝居のように仕立てたものを、何問も用意してくれていたからである。Aさんは、「児童館が主催者なんだから児童館が決めるべき」と主張され、私と児童館職員は「実行委員会が主催だから、グループ内で決めてもらって構わない」と説明したが、Aさんは納得しかねる様子であった。結局、実際の様子を見てから決めることになったが、予想よりプログラム進行に余裕があり、防災クイズも無事楽しむことができた。

当日朝の、トラブルとも言えないほどの出来事であったが、このような小さな意見の相違、世代間ギャップなどは、実行委員会形式にはつきものである。しかしそれを乗り越えたからこそその達成感が味わえた、ともいえる。反省会では、「実行委員会の形にしたのがよかった」との意見で一致し、自分たちで作り上げ、運営した実感

を皆が持てた行事になった点が素晴らしいと感じた。

また、反省会では、非常持ち出し袋担当の防コミDさんから、「100人いて、持ち出し袋に興味を持ってくれたのは2人だけ！一緒にコーナーを担当してくれたEさん入れても3人！母親同士でお喋りして説明も聞かないし、無駄だった。」との意見も出た。しかし、防コミFさんからの「今年3人なら、来年は6人興味持ってくれるように考えようよ！」との発言で、来年度にまで話が及び、継続実施も決定した。

この事業で、Dさんと共に非常持ち出し袋を担当した母親Eさんは、この日をきっかけに非常持ち出し品に興味を持ったそうだ。後日地域で行われた災害時要援護者避難訓練において「私たち顔負けの非常持ち出し品の展示を行ってくださったんですよ」とDさんから嬉しそうに報告があった。スタンプラリー用の消しゴムハンコを作ってくれた母親Bさんを講師とした「干支のサル消しゴムハンコ」作り教室も、防コミメンバーも参加して近く実施される予定である。地域で会っても声を掛け合うようになったという、この世代間の交流は、今後も続いていくであろう。

### 3. 防災プログラムを児童館で実践する意義

ここまで、「愛のミルク」「ぼうさいダック」「クロスロード」そして「うおっこぼうさいがっこう」の実践を紹介した。他にも「防災かるた」「防災クイズ」等、やはり震災を経験している神戸ならではの熱心さで多くのプログラムが実施されている。

人気のあるプログラムの共通点としては、やはり「遊びが真ん中」ということである。防災プログラムを企画する上で陥りやすい危険が、「防災を学ぶために遊びを入れる」といったプログラム構成になることである。防災を学ぶことは大事なことであるが、あくまでも遊びを通した啓発のプログラムでなければ、児童館で実践する意義はあまり感じられない。特に神戸は、震災の発生した1月17日前後には学校でも、地域で

も防災の行事が目白押しになる。ある児童館では、夏休みに防災プログラムを実施しようとしたら、「また勉強？」と子どもに言われたそうだ。

子どもたちにとって「勉強させられている」といった気持ちが勝つようなプログラムになっていないか、十分に精査する必要がある。

また、ゲームの形態をとっていても、その内容が対象児童の年齢や興味にそぐわなかったり、ゲームのルール自体が複雑で楽しめなかったりしたのでは、これも児童館で行う実践としてはふさわしくない。遊びの中で、自然と防災に対する意識が向上したり、知的好奇心を満たす喜びを味わえたりするようなプログラムを組み立てるには、児童館スタッフ等遊びのプロが、持てる力を駆使して、工夫を凝らしたプログラムにする必要がある。遊びのプロが企画した完成度の高い防災プログラムを直接提供できるところに、児童館で防災プログラムを実践する最も重要な意義があると考ええる。

もうひとつの意義として、多様な世代を巻き込んだ総合的な防災プログラムが実施できる点が挙げられる。今回紹介した「うおっこぼうさいがっこう」のように、乳幼児を連れた母親と、比較的年齢層の高い防コミのコラボレーションなどは、他では実現しにくいものであろう。また、中高生など、地域との接点を持ちにくい世代へのアプローチにおいても、児童館は力を発揮し得る。前述の「クロスロード」などを活用すれば、中高生や若い世代の母親、災害弱者である障がい者や高齢者が共に防災について考え、交流を持つ重層的な防災啓発活動も可能となる。

また、「愛のミルク」の中でも述べたように「いつでも」「だれでも」参加しやすいプログラムが実施できるという点も、重要な意味を持つ。親子クラブなど、普段参加している行事の一部として、また放課後児童クラブ内での数分間の活動として実施する事により、防災にあまり関心がなくとも気軽に参加することができる。この「防災意識の底上げ」を図っていくことが、神戸において、震災の教訓を風化させず、次世代に継承していく方策のひとつではないだろうか。

#### 4. おわりに

阪神・淡路大震災から20年経った現在の神戸でも、「防災を遊びにするなんて」「不謹慎だ」という声が聞かれる。東日本大震災の被害を受けた東北の児童館職員からは、「子どもたちは“避難”という言葉ひとつにも過敏に反応するので気を付けています」などという話も聞いた。防災プログラムについては、その地域性等も十分配慮して、開発、実施していく必要がある。しかし、震災から20年を経た神戸だからこそできる、児童館ならではの防災プログラムが他にもあるはずである。また、現在取り組んでいるプログラムにもまだまだ改良の余地が残されている。震災の経験を過去のものとして、次なる災害に向けて教訓を継承していく防災プログラムを今後も児童館から発信していきたい。そして、プログラムを体験した若い世代がこれからの防災を担い、新たな取り組みを始めてくれることを期待したい。